

琴のそら音

夏目漱石

青空文庫

「珍しいね、久しく来なかったじゃないか」と津田君が出過ぎた洋灯ランプの穂を細めながら尋ねた。

津田君がこう云った時、余ははち切れて膝頭ひざがしらの出そうなズボンの上で、相馬焼そうまやきの茶碗ちやわんの糸底いとそこを三本指でぐるぐる廻しながら考えた。なるほど珍しいに相違ない、この正月に顔を合せたぎり、花盛りの今日きょうまで津田君の下宿を訪問した事はない。

「来よう来ようと思ひながら、つい忙がしいものだから——」

「そりゃあ、忙がしいだろう、何と云つても学校にいたうちとは違うからね、この頃でもやはり午後六時までかい」

「まあ大概そのくらいさ、家うちへ帰つて飯を食うとそれなり寝てし

もう。勉強どころか湯にも碌々ろくろくはい這入らないくらいだ」と余は茶碗を畳の上へ置いて、卒業が恨めしいと云う顔をして見せる。

津田君はこの一言いちごんに少々同情の念を起したと見えて「なるほど少し瘠やせたようだが、よほど苦しいのだろう」と云う。気のせいか当人は学士になってから少々肥ふとったように見えるのが癪しゃくに障さわる。机の上に何だか面白そうな本を広げて右の頁ページの上に鉛筆で註が入れてある。こんな閑ひまがあるかと思うと羨うらやましくもあり、忌いまい々ましくもあり、同時に吾身が恨めしくなる。

「君は不相変あいかわらず勉強で結構だ、その読みかけてある本は何かね。ノートなどを入れてだいぶ叮嚀ていねいに調べているじゃないか」

「これか、なにこれは幽霊の本さ」と津田君はすこぶる平気な顔

をしている。この忙いそしい世の中に、流行はやりもせぬ幽霊の書物を澄すまして愛読するなどというのは、呑のん氣を通り越して贅ぜい沢たくの沙汰だと思う。

「僕も氣樂に幽霊でも研究して見たいが、——どうも毎日芝から小石川の奥まで帰るのだから研究は愚か、自分が幽霊になりそうなくらいさ、考えると心細くなってしまう」

「そうだったね、つい忘れていた。どうだい新世帯しんじよたいの味は。一戸を構おのずえると自から主人らしい心持がするかね」と津田君は幽霊を研究するだけあつて心理作用に立ち入った質問をする。

「あんまり主人らしい心持もしないさ。やつぱり下宿の方が氣樂でいいようだ。あれでも万事整頓していたら旦那だんなの心持と云う特

別な心持になれるかも知れんが、何しろ真鍮しんちゆうの薬缶やかんで湯を沸かしたり、ブリツキの金盥かなだらいで顔を洗つてゐる内は主人らしくないからな」と實際のところを白状する。

「それでも主人さ。これが俺のうちだと思えば何となく愉快だろう。所有と云う事と愛惜あいせきという事は大抵の場合において伴うのが原則だから」と津田君は心理学的に人の心を説明してくれる。学者と云うものは頼みもせぬ事を一々説明してくれる者である。

「俺の家だと思えばどうか知らんが、てんで俺の家だと思いたくないんだからね。そりや名前だけは主人に違いないさ。だから門かど口ぐちにも僕の名刺だけは張り付けて置いたがね。七円五十銭の家賃の主人なんざあ、主人にしたところが見事な主人じゃない。主

人中の属官なるものだね。主人になるなら勅任主人か少なくとも奏任主人にならなくっちゃ愉快はないさ。ただ下宿の時分より面倒が殖ふえるばかりだ」と深くも考えずに浮氣うわきの不平だけを發表して相手の氣色けしきを窺うかがう。向うが少しでも同意したら、すぐ不平の後陣ごじんを繰くり出すつもりである。

「なるほど真理はその辺にあるかも知れん。下宿を続けている僕と、新たに一戸を構えた君とは自から立脚地が違ちがうからな」と言語はすこぶるむずかしいがとにかく余の説に賛成だけはしてくれ。この模様ならもう少し不平を陳列しても差さし支つかえはない。

「まずうちへ帰ると婆さんが横綴よことじの帳面を持って僕の前へ出てくる。今日は御味噌を三錢、大根を二本、鶉うずら豆まめを一錢五厘買

いましたと精密なる報告をするんだね。厄介きわまるのさ」

「厄介きわまるなら廃せ^よばいいじゃないか」と津田君は下宿人だけあつて無雑作^{むぞうさ}な事を言う。

「僕は廃^よしてもいいが婆さんが承知しないから困る。そんな事は一々聞かないでもいいから好^{いい}加減^{かげん}にしてくれと云うと、どう致しまして、奥様の入^いらつしやらない御家^{おうち}で、御台所を預かつております以上は一銭一厘でも間違いがあつてはなりません、てつて頑^{がん}として主人の云う事を聞かないんだからね」

「それじゃあ、ただうんうん云つて聞いてる振^{ふり}をしていりやよろう」津田君は外部の刺激のいかに関せず心は自由に働き得ると思へているらしい。心理学者にも似合しからぬ事だ。

「しかしそれだけじゃないのだからな。精細なる会計報告が済むと、今度は翌日あすの御菜おかずについて綿密な指揮を仰ぐのだから弱る」

「見計みはからつて調理こしらえろと云えばいいじゃないか」

「ところが当人見計らうだけに、御菜に関して明瞭なる觀念がないのだから仕方がない」

「それじゃ君が云い付けるさ。御菜のプログラムぐらい訳わけないじゃないか」

「それが容易たやすく出来るくらいなら苦にやならないさ。僕だつて御菜上の智識はすこぶる乏とほしいやね。明日あしたの御みおつけの実みは何に致しましょうとくると、最初から即答は出来ない男なんだから：

…」

「何だい御みおつけと云うのは」

「味噌汁の事さ。東京の婆さんだから、東京流に御みおつけと云うのだ。まずその汁の実を何に致しましょうと聞かれると、実になり得べき者を秩序正しく並べた上で選択をしなければならんだろう。一々考え出すのが第一の困難で、考え出した品物について取捨をするのが第二の困難だ」

「そんな困難をして飯を食つてるのは情ない訳だ、君が特別に数^す奇^きなものが無いから困難なんだよ。二個以上の物体を同等の程度で好悪^{こうお}するときは決断力の上に遅鈍なる影響を与えるのが原則だ」とまた分り切った事をわざわざむずかしくしてしまう。

「味噌汁の実まで相談するかと思うと、妙なところへ干渉するよ」

「へえ、やはり食物上にかね」

「うん、毎朝梅干に白砂糖を懸^かけて来て是非^{ぜひ}一つ食えツて云うんだがね。これを食わないと婆さんすこぶる御機嫌が悪いのさ」

「食えばどうかするのかい」

「何でも厄^{やく}病^び除^よのまじないだそうだ。そうして婆さんの理由

が面白い。日本中どの宿屋へ泊つても朝、梅干を出さない所はない。まじないが利^きかなければ、こんなに一般の習慣となる訳がないと云つて得意に梅干を食わせるんだからな」

「なるほどそれは一理あるよ、すべての習慣は皆相応の功力があるので維持せらるるのだから、梅干だって一概に馬鹿には出来ないさ」

「なんて君まで婆さんの肩を持った日にや、僕はいよいよ主人らしからざる心持に成つてしまわあ」と飲みさしの巻煙草まきたばこを火鉢の灰の中へ擲たき込む。燃え残りのマツチの散る中に、白いものがさと動いて斜めななに一の字が出来る。

「とにかく旧弊な婆さんだな」

「旧弊はとくに卒業して迷信婆ばばあ々さ。何でも月に二三返べんは伝通でんずう院いん辺の何とか云う坊主の所へ相談に行く様子だ」

「親類に坊主でもあるのかい」

「なに坊主が小遣取こづかいとりに占ういをやるんだがね。その坊主がまた

余計な事ばかり言うもんだから始末に行かないのさ。現に僕が家うちを持つ時なども鬼門きもんだとか八方塞りだとか云つて大に弱おおいらした

もんだ」

「だつて家^{うち}を持つてからその婆さんを雇つたんだろう」

「雇つたのは引き越す時だが約束は前からして置いたのだからね。
 実はあの婆々^{ばばあ}も四谷の宇野^{うの}の世話で、これなら大丈夫だ独り^{ひと}で留守をさせても心配はないと母が云うからきめた訳さ」

「それなら君の未来の妻君の御母^{おつか}さんの御眼鏡^{おめがね}で人^{じん}撰^{せん}に預つた婆さんだからたしかなもんだろう」

「人間はたしかに相違ないが迷信には驚いた。何でも引き越すと云う三日前に例の坊主の所へ行つて見て貰つたんだそうだ。すると坊主が今本郷から小石川の方へ向いて動くのははなはだよくない、きつと家内に不幸があると云つたんだがね。——余計な事じ

やないか、何も坊主の癖にそんな知った風な妄言^{もうごん}を吐^はかんでも
の事だあね」

「しかしそれが商売だからしょうがない」

「商売なら勘弁してやるから、金だけ貰^さつて当り障^{さわ}りのない事を
喋^{しゃべ}舌^べるがいいや」

「そう怒つても僕の咎^{とが}じやないんだから埒^{らち}はあかんよ」

「その上若い女に祟^{たた}ると御負けを附加^{つけた}したんだ。さあ婆さん驚く

まい事か、僕のうちに若い女があるとすれば近い内貰^くうはずの宇
野の娘に相違ないと自分で見解^{くだ}を下して独りで心配しているのさ」

「だって、まだ君の所へは来んのだろう」

「来んうちから心配をするから取^{とりこし}越^こ苦労さ」

「何だか洒落^{しやれ}か真面目か分らなくなつて来たぜ」

「まるで御話にも何もなりやしない。ところで近頃僕の家^{おほえ}の近辺で野良犬^{のらいぬ}が遠吠^{とおほえ}をやり出したんだ。……」

「犬の遠吠と婆さんとは何か関係があるのかい。僕には聯想さえ浮ばんが」と津田君はいかに得意の心理学でもこれは説明^{でき}が出来悪いとちよつと眉^{まゆ}を寄せる。余はわざと落ちつき払つて御茶を一

杯と云う。相馬焼の茶碗は安くて俗な者である。もとは貧乏士族が内職に焼いたとさえ伝聞している。津田君が三十匁^{でがら}の出殻^なを浪^{みなみ}々この安茶碗^{みなみ}についてくれた時余は何となく厭^{いや}な心持がして飲

む気がしなくなつた。茶碗の底を見ると狩野法眼^{かのうほうげん}元信^{もとのぶ}流^{りゅう}の馬^はが勢よく跳ね^はている。安いに似合^あわず活潑^{かつぱつ}な馬だと感心はし

たが、馬に感心したからと云つて飲みたくない茶を飲む義理もあるまいと思つて茶碗は手に取らなかつた。

「さあ飲みたまえ」と津田君が促^{うな}がす。

「この馬はなかなか勢がいい。あの尻尾^{しっぽ}を振つて鬣^{たてがみ}を乱している所は野馬^{のんま}だね」と茶を飲まない代りに馬を賞^ほめてやった。

「冗^{じょうだん}談じゃない、婆さんが急に犬になるかと、思うと、犬が急に馬になるのは烈^{はげ}しい。それからどうしたんだ」としきりに後^{あと}を聞きたがる。茶は飲まんでも差^さし支^{つか}えない事となる。

「婆さんが云うには、あの鳴き声はただの鳴き声ではない、何でもこの辺^{へん}に変^へがあるに相違ないから用心しなくてはいいかと云うのさ。しかし用心をしろと云つたつて別段用心の仕様^{しよう}もないから

打ち遣^やつて置くから構わないが、うるさいには閉口だ」

「そんなに鳴き立てるのかい」

「なに犬はうるさくも何ともないさ。第一僕はぐうぐう寝^ねてしま
うから、いつどんなに吠^ほえるのか全く知らんくらいさ。しかし婆
さんの訴えは僕の起きている時を忪^{えら}んで来るから面倒だね」

「なるほどいかに婆さんでも君の寝ている時をよつて御氣を御つ
け遊ばせとも云うまい」

「ところへもつて来て僕の未来の細君が風邪^{かぜ}を引いたんだね。ち
ようど婆さんの御誂^{おあつら}え通りに事件が輻輳^{ふくそう}したからたまらない」
「それでも宇野の御嬢さんはまだ四谷にいるんだから心配せんで
もよさそうなものだ」

「それを心配するから迷信婆々さ、あなたが御移りにならんと御嬢様の御病気がはやく御全快になりませんから是非この月中に方角のいい所へ御転宅遊ばせと云う訳さ。飛んだ預言者に捕まつて、大迷惑だ」

「移るのもいいかも知れんよ」

「馬鹿あ言つてら、この間越したばかりだね。そんなにたびたび引越しをしたら身代限しんだいかぎりをするばかりだ」

「しかし病人は大丈夫かい」

「君まで妙な事を言うぜ。少々伝通院の坊主にかぶれて来たんじゃないか。そんなに人を威嚇おどかすもんじやない」

「威嚇おどかすんじゃない、大丈夫かと聞くんた。これでも君の妻君

の身の上を心配したつもりなんだよ」

「大丈夫にきまつてるさ。咳嗽^{せき}は少し出るがインフルエンザなんだもの」

「インフルエンザ？」と津田君は突然余を驚かすほどな大きな声を出す。今度は本当に威嚇^{おど}かされて、無言のまま津田君の顔を見詰める。

「よく注意したまえ」と二句目は低い声で云った。初めの大きな声に反してこの低い声が耳の底をつき抜けて頭の中へしんと浸^しみ込んだような気持がする。なぜだか分らない。細い針は根まで這^は入る、低くても透^{とお}る声は骨に答えるのであろう。碧瑠璃^{へきるり}の大空に瞳^{ひとみ}ほどな黒き点をはたと打たれたような心持ちである。消えて失^う

せるか、溶けて流れるか、武庫山卸しむこやまおろしにならぬとも限らぬ。この瞳ほどな点の運命はこれから津田君の説明で決せられるのである。余は覚えず相馬焼の茶碗を取り上げて冷たき茶を一時いちじにぐつと飲み干した。

「注意せんといかんよ」と津田君は再び同じ事を同じ調子で繰り返す。瞳ほどな点が一段の黒味を増す。しかし流れるとも広がるとも片づかぬ。

「縁喜えんぎでもない、いやに人を驚かせるぜ。ワハハハハハ」と無理に大きな声で笑って見せたが、腑ふの抜けた勢のない声が無意味に響くので、我ながら気がついて途中でぴたりとやめた。やめると同時にこの笑がいよいよ不自然に聞かれたのでやはりしまいまで

笑い切れば善^よかつたと思う。津田君はこの笑を何と聞いたか知らん。再び口を開^{ひら}いた時は依然として以前の調子である。

「いや実はこう云う話がある。ついこの間の事だが、僕の親戚の者がやはりインフルエンザに罹^かつてね。別段の事はないと思つて好^{いい}加減^{かげん}にして置いたら、一週間目から肺炎に變じて、とうとう一箇月立たない内に死んでしまった。その時医者の話さ。この頃のインフルエンザは性^{たち}が悪い、じきに肺炎になるから用心をせんといかんと云つたが——実に夢のようさ。可哀^{かわい}そうでね」と言い掛けて厭^{いや}な寒い顔をする。

「へえ、それは飛んだ事だつた。どうしてまた肺炎などに変じたのだ」と心配だから参考のため聞いて置く気になる。

「どうしてって、別段の事情もないのだが——それだから君のも注意せんといかんと云うのさ」

「本当だね」と余は満腹の真面目まじめをこの四文字に籠こめて、津田君の眼の中を熱心に覗のぞき込んだ。津田君はまだ寒い顔をしている。

「いやだいやだ、考えてもいやだ。二十二や三で死んでは実につまらんからね。しかも所天おつとは戦争に行つてるんだから——」

「ふん、女か？ そりや気の毒だなあ。軍人だね」

「うん所天は陸軍中尉さ。結婚してまだ一年にならんのさ。僕は通夜つやにも行き葬式の供にも立ったが——その夫人の御母おつかさんが泣いてね——」

「泣くだろう、誰だつて泣かあ」

「ちょうど葬式の当日は雪がちらちら降って寒い日だったが、御経が済んでいよいよ棺を埋める段になると、御母さんが穴の傍へしやがんだぎり動かない。雪が飛んで頭の上が斑になるから、僕が蝙蝠傘をさし懸けてやった」

「それは感心だ、君にも似合わない優しい事をしたものだ」

「だって気の毒で見えていられないもの」

「そうだろう」と余はまた法眼ほうげん元信もとのもぶの馬を見る。自分ながら

この時は相手の寒い顔が伝染しているに相違ないと思った。咄嗟とつさの間に死んだ女の所天の事が聞いて見たくなる。

「それでその所天の方は無事なのかね」

「所天は黒木軍についているんだが、この方はまあ幸さいわいに怪我もし

ないようだ」

「細君が死んだと云う報知を受取ったらさぞ驚いたろう」

「いや、それについて不思議な話があるんだがね、日本から手紙の届かない先に細君がちゃんと亭主の所へ行っているんだ」

「行つてるとは？」

「逢い^あに行つてるんだ」

「どうして？」

「どうしてって、逢いに行つたのさ」

「逢いに行くにも何にも当人死んでるんじゃないか」

「死んで逢いに行つたのさ」

「馬鹿あ云つてら、いくら亭主が恋しいたつて、そんな芸が誰

に出来るもんか。まるで林屋正三の怪談だ」

「いや実際行つたんだから、しようがない」と津田君は教育ある人にも似合ず、頑固に愚^ぐな事を主張する。

「しようがないって——何だか見て来たような事を云うぜ。おかしいな、君本当にそんな事を話してるのかい」

「無論本当さ」

「こりや驚いた。まるで僕のうちの婆さんのようだ」

「婆さんでも爺さんでも事実だから仕方がない」と津田君はいよいよ躍^{やつき}起になる。どうも余にからかっているようにも見えない。

はてな真面目^{まじめ}で云つているとすれば何か曰^{いわ}くのある事だろう。津

田君と余は大学へ入ってから科は違うたが、高等学校では同じ組

にいた事もある。その時余は大概四十何人の席末を汚すのが例であつたのに、先生はきぜん然として常に二三番を下くだらなかつたところをもつて見ると、頭脳は余よりも三十五六枚方がためいせき明晰に相違ない。その津田君が躍起やつきになるまで弁護するのだから満更まんざらの出鱈目ではあるまい。余は法学士である、刻下の事件をありのままに見て常識で捌さばいて行くよりほかに思慮を廻めぐらすのは能あたわざるよりもむしろ好まざるところである。幽霊だ、祟たたりだ、因縁いんねんだなどと雲を攫つかむような事を考えるのは一番嫌きらひである。が津田君の頭脳には少々恐れ入っている。その恐れ入つてゐる先生が真面目に幽霊談をするととなると、余もこの問題に対する態度を義理にも改めたくなる。実を云うと幽霊と雲くもすけ助は維新いしん以来永久廃業した者とのみ信じて

いたのである。しかるに先刻さつきから津田君の容子ようすを見ると、何だかこの幽霊なる者が余の知らぬ間まに再興されたようにもある。先刻さつき机の上にある書物は何かと尋ねた時にも幽霊の書物だとか答えた
と記憶する。とにかく損はない事だ。忙がしい余に取ってはこんな機会はまたとあるまい。後学のため話だけでも拝聴して帰ろう
とようやく肚はらの中で決心した。見ると津田君も話の続きが話したいと云う風である。話したい、聞きたいと事がきまれば訳はない。
漢水は依然として西南に流れるのが千古の法則だ。

「だんだん聞き糺ただして見ると、その妻と云うのが夫おつとの出征前に誓つたのだそうだ」

「何を？」

「もし万一御留守中に病気で死ぬような事がありましたもただは死にませんて」

「へえ」

「かなら こんぱく必ず魂魄おそばだけは御傍へ行つて、もう一遍御目に懸かりますと云つた時に、亭主は軍人で磊らい落らくな氣性きしょうだから笑いながら、よろしい、いつでも来なさい、戦いくさの見物をさしてやるからと云つたぎり満州へ渡つたんだがね。その後そんな事はまるで忘れてしまつていつこう氣にも掛けなかつたそうだ」

「そうだろう、僕なんざ軍いくさに出なくつても忘れてしまわあ」

「それでその男が出立をする時細君が色々手伝つて手荷物などを買つてやった中に、懷中持の小さい鏡があつたそうだ」

「ふん。君は大変詳しく調べているな」

「なにあとで戦地から手紙が来たのでその顛末てんまつが明瞭になった訳だが。——その鏡を先生常に懷中くわうちゅうしていてね」

「うん」

「ある朝例のごとくそれを取り出して何心なく見たんだそうだ。

するとその鏡の奥に写ったのが——いつもの通り髭ひげだらけな垢染あかじ

みた顔だろうと思うと——不思議だねえ——実に妙な事があるじゃないか」

「どうしたい」

「青白い細君の病氣に窺やつれた姿がスーとあらわれたと云うんだがね——いえそれはちよつと信じられんのさ、誰に聞かしても嘘だ

ろうと云うさ。現に僕などもその手紙を見るまでは信じない一人であつたのさ。しかし向うで手紙を出したのは無論こちらから死去の通知の行つた三週間も前なんだぜ。嘘をつくつたつて嘘にする材料のない時ださ。それにそんな嘘をつく必要がないだろうじやないか。死ぬか生きるかと云う戦争中にこんな小説染みた呑気な法螺ほらを書いて国元へ送るものは一人もない訳ださ」

「そりや無い」と云つたが実はまだ半信半疑である。半信半疑ではあるが何だか物凄ものすごいい、気味の悪い、一言いちごんにして云うと法学士に似合わしからざる感じが起こつた。

「もつとも話しはしなかつたそうさ。黙つて鏡の裏うちから夫の顔をしけじけ見詰めたぎりだそうだが、その時夫の胸うちの中に訣別けつべつの

時、細君の言つた言葉が渦うずのように忽然こつぜんと湧わいて出たと云うんだが、こりやそうだろう。焼やき小手てで脳味噌をじゅつと焚やかれたよ
うな心持だと手紙に書いてあるよ」

「妙な事があるものだな」手紙の文句まで引用されると是非共信
じなければならぬようになる。何となく物騒ぶつそうな気合けわいである。こ
の時津田君がもしワツとでも叫んだら余はきつと飛び上つたに相
違ない。

「それで時間を調べて見ると細君が息を引き取つたのと夫が鏡を
眺ながめたのが同日同刻になっている」

「いよいよ不思議だな」この時ときに至つては真面目に不思議と思い
出した。「しかしそんな事が有り得る事かな」と念のため津田君

に聞いて見る。

「ここにもそんな事を書いた本があるがね」と津田君は先刻さつきの書物を机の上から取り卸しながら「近頃じゃ、有り得ると云う事だけは証明されそうだよ」と落ちつき払って答える。法学士の知らぬ間まに心理学者の方では幽霊を再興しているなと思うと幽霊もいよいよ馬鹿に出来なくなる。知らぬ事には口が出せぬ、知らぬは無能力である。幽霊に関しては法学士は文学士に盲従しなければならぬと思う。

「遠い距離において、ある人の脳の細胞と、他の人の細胞が感じて一種の化学的変化を起すと……」

「僕は法学士だから、そんな事を聞いても分らん。要するにそう

云う事は理論上あり得るんだね」余のごとき頭脳不透明なるものは理窟りくつを承うけたまわるより結論だけ呑み込んで置く方が簡便である。

「ああ、つまりそこへ帰着するのさ。それにこの本にも例が沢山あるがね、その内でロード・ブローアムの見た幽霊などは今の話しとまるで同じ場合に属するものだ。なかなか面白い。君ブローアムは知っているだろう」

「ブローアム？ ブローアムたなんだい」

「英国の文学者さ」

「道理で知らんと思った。僕は自慢じゃないが文学者の名なんかシエクスピヤとミルトンとそのほかに二三人しか知らんのだ」

津田君はこんな人間と学問上の議論をするのは無駄だと思った

か「それだから宇野の御嬢さんもよく注意したまいと云う事さ」と話を元へ戻す。

「うん注意はさせるよ。しかし万一の事がありましたらきつと御目に懸りに上りますなんて誓ちかは立てないのだからその方は大丈夫だろう」と洒落しやれて見たが心の中うちは何となく不愉快であつた。時計を出して見ると十一時に近い。これは大変。うちではさぞ婆さんが犬の遠吠とおぼえを苦にしているだろうと思うと、一刻も早く歸りたくなる。「いずれその内婆さんに近づきになりに行くよ」と云う津田君に「御馳走をするから是非来たまえ」と云いながら白山御殿町の下宿を出る。

我からと惜気おしげもなく咲いた彼岸桜ひがんざくらに、いよいよ春が来たなど

浮かれ出したのもわずかに三日の間である。今では桜自身さえ早
 待^{やま}ったと後悔しているだろう。生^{なまぬる}温く帽を吹く風に、額^{ひたいぎわ}際^は
 から煮染^{にじ}み出す膏^{あぶら}と、粘^{ねば}り着く砂埃^{すなほこ}りとをいっしょに拭^{ぬぐ}い去つ
 た一昨日^{おととい}の事を思うと、まるで去年のような心持ちがする。それ
 ほどのうから寒くなつた。今夜は一層である。冴^{さえ}返^{かえ}るなどと
 云う時節でもないに馬鹿^{ばか}馬鹿^{ばか}しいと外^{がい}套^{とう}の襟^{えり}を立てて盲啞^{もうあ}学校
 の前から植物園の横をだらだらと下りた時、どこで撞^つく鐘だか夜
 の中に波を描いて、静かな空をうねりながら来る。十一時だなど
 思う。――時の鐘は誰が発明したものか知らん。今までは気がつ
 かなかつたが注意^{ちぎ}して聴いて見ると妙な響である。一つ音が粘^{ねば}り
 強い餅^{もち}を引き千切^{ちぎ}つたように幾つにも割れてくる。割れたから縁

が絶えたかと思うと細くなって、次の音に繋つながる。繋がって太くなつたかと思うと、また筆の穂のように自然と細くなる。――あの音はいやに伸びたり縮んだりするなど考えながら歩ある行くと、自分の心臓の鼓動も鐘の波のうねりと共に伸びたり縮んだりするように感ぜられる。しまいには鐘の音にわが呼吸を合せたくなる。今夜はどうしても法学士らしくないと、足早に交番の角を曲るとき、冷たい風に誘われてポツリと大粒の雨が顔にあたる。

極楽水はいやに陰気なところである。近頃は両側へ長家ながやが建つたので昔ほど淋さみしくはないが、その長家が左右共閨げき然ぜんとして空家きやのように見えるのは余り氣持のいいものではない。貧民に活動はつき物である。働いておらぬ貧民は、貧民たる本性を遺失して

生きたものとは認められぬ。余が通り抜ける極楽水ごくらくみずの貧民は打
 ても蘇よみ返がえる景色けしきなきまでに静かである。——實際死んでいる
 のだろう。ポツリポツリと雨はようやく濃こまかになる。傘かさを持つて
 来なかつた、ことによると帰るまでにはずぶ濡ぬれになるわいと舌打
 をしながら空を仰ぐ。雨は闇の底から蕭しょう々しょうと降る、容易に晴
 れそうにもない。

五六間先にたちまち白い者が見える。往來おうらいの真中に立ち留つ
 て、首を延のびしてこの白い者をすかしているうちに、白い者は容赦
 もなく余の方へ進んでくる。半分はんぶんと立たぬ間まに余の右側を掠かすめ
 るごとく過ぎ去つたのを見ると——蜜柑箱みかんばこのようなものに白い
 巾きれをかけて、黒い着物をきた男が二人、棒を通して前後から担かつい

で行くのである。おおかた葬式か焼場であらう。箱の中のは乳飲ちの子みこに違ちがいない。黒い男は互たがひに言葉も交えずに黙もくつてこの棺かん桶おけを担かかいで行く。天下に夜やちゆう中棺桶こくおけを担かかうほど、当然の出来事はあるまいと、思い切つた調子でコツコツ担かかいで行く。闇に消える棺桶をしばらくは物珍らし氣に見送つて振り返つた時、また行手から人声ひとこゑが聞え出した。高い声でもない、低い声でもない、夜が更ふけていいるので存外反響はんきやうが烈はげしい。

「昨日きのう生きれて今日きよう死しぬ奴もあるし」と一人が云うと「寿命だよ、全く寿命だから仕方がない」と一人が答える。二人の黒い影がまた余あまの傍そばを掠かすめて見る間まに闇の中へもぐり込む。棺この後あとを追つて足早きやうに刻きむ下駄ぎょの音のみが雨に響く。

「昨日生れて今日死ぬ奴もあるし」と余は胸のうち中で繰り返して見た。昨日生まれて今日死ぬ者さえあるなら、昨日病氣にかか雇つて今日死ぬ者は固よりあるべきはずである。二十六年も娑婆しやばの氣を吸つたものは病氣に雇らんでも充分死ぬ資格を具そなえている。こうやつて極樂水を四月三日の夜の十一時に上りのほつつあるのは、ことによると死にに上つてるのかも知れない。——何だか上りたくない。しばらく坂の途中で立つて見る。しかし立つてゐるのは、ことによると死にに立つてゐるのかも知れない。——また歩行あるき出す。死ぬと云う事がこれほど人の心を動かすとは今までつい氣がつかなんだ。氣がついて見ると立つても歩行いても心配になる、このようすでは家へ歸うちつて蒲団ふとんの中へ這入はいつてもやはり心配になるか

も知れぬ。なぜ今までは平気で暮していたのであろう。考えて見ると学校にいた時分は試験とベースボールで死ぬと云う事を考える暇がなかった。卒業してからはペンとインキとそれから月給の足りないのと婆さんの苦情でやはり死ぬと云う事を考える暇がなかった。人間は死ぬ者だとはいかに呑気な余のんきよでも承知しておつたに相違ないが、實際余も死ぬものだと感じたのは今夜が生れて以來始めてである。夜と云うむやみに大きな黒い者が、歩行いても立つても上下四方から閉じ込めてといて、その中に余と云う形体を溶かし込まぬと承知せぬぞと逼るせまように感ぜらるる。余は元來呑気なだけに正直なところ、功名心には冷淡な男である。死ぬとしても別に思い置く事はない。別に思い置く事はないが死ぬのは非

常に厭だ、どうしても死にたくない。死ぬのはこれほどいやな者かなと始めて覚つたように思う。雨はだんだん密になるので外套が水を含んで触ると、濡れた海綿を圧すようにじくじくする。

竹早町を横ぎつて切支丹坂へかかる。なぜ切支丹坂と云うのか分らないが、この坂も名前に劣らぬ怪しい坂である。坂の上へ来た時、ふとせんだつてここを通つて「日本一急な坂、命の欲しい者は用心じゃ用心じゃ」と書いた張札が土手の横からはすに往来へ差し出ているのを滑稽だと笑つた事を思い出す。今夜は笑うどころではない。命の欲しい者は用心じやと云う文句が聖書にもある格言のように胸に浮ぶ。坂道は暗い。滅多に下りると滑

つて尻餅しりもちを搗く。 険けん呑だと八合目あたりから下を見て覷ねらいをつ
 ける。 暗くて何もよく見えぬ。 左の土手から 古ふるえのき 榎が無遠慮に
 枝を突き出して日の目の通わぬほどに坂を蔽おおうているから、 昼で
 もこの坂を下りる時は谷の底へ落ちると同様あまり善いい心持では
 ない。 榎は見えるかなと顔を上げて見ると、 あると思えばあり、
 無いと思えば無いほどな黒い者に雨の注ぐ音がしきりにする。 こ
 の暗闇まつくらな坂を下りて、 細い谷道を伝つて、 茗荷谷みようがだに むこう あがを向へ上つ
 て七八丁行けば 小日向台町こびなただいまちの余が家へ帰られるのだが、 向へ上
 がるまでがちと気味がわるい。

茗荷谷の坂の中途に当るくらいな所に赤い鮮あざやかな火が見える。
 前から見えていたのか顔をあげる途端に見えだしたのか判然しな

いが、とにかく雨を透^{すか}してよく見える。あるいは屋敷の門口^{もんぐち}に立
ててある瓦斯^{ガス}灯ではないかと思つて見てみると、その火がゆらり
ゆらりと盆灯籠^{ぼんどうろう}の秋風に揺られる具合に動いた。——瓦斯灯で
はない。何だろうと見ていると今度はその火が雨と闇の中を波の
ように縫つて上から下へ動いて来る。——これは提灯^{ちようちん}の火に
相違ないとようやく判断した時それが不意と消えてしまう。

この火を見た時、余ははつと露子^{つゆこ}の事を思い出した。露子は余
が未来の細君の名である。未来の細君とこの火とどんな関係があ
るか心理学者の津田君にも説明は出来んかも知れぬ。しかし心
理学者の説明し得るものでなくては思い出してならぬとも限るま
い。この赤い、鮮^{あざや}かな、尾の消える縄に似た火は余をしてたしか

に余が未来の細君をとつさの際に思い出さしめたのである。――

同時に火の消えた瞬間が露子の死を未練もなく拈出した。額

を撫なでると膏あぶらあせ汗と雨でずるずるする。余は夢中であるく。

坂を下り切ると細い谷道で、その谷道が尽きたと思うあたりか

らまた向き直つて西へ西へと爪つまあが上りに新しい谷道がつづく。こ

の辺はいわゆる山の手の赤土で、少しでも雨が降ると下駄の歯を

吸い落すほどに濡ぬかる。暗さは暗し、靴は踵かかとを深く土に据えつけて

容易たやすくは動かぬ。曲りくねつてむやみやたらに行くとか枸杞垣くこがきとも

覚しきものの鋭どく折れ曲る角かどでぱたりとまた赤い火に出くわし

た。見ると巡査である。巡査はその赤い火を焼くまでに余の頬に

押し当てて「悪るいから御気を付けなさい」と言い棄てて擦すれ違

った。よく注意したまえと云った津田君の言葉と、悪いから御氣をつけなさいと教えた巡査の言葉とは似ているなと思うとたちまち胸が鉛なまりのように重くなる。あの火だ、あの火だと余は息を切らして馳かけ上る。

どこをどう歩行あるいたとも知らず流星のごとく吾家わがやへ飛び込んだのは十二時近くであろう。三分心さんぶしんの薄暗いランプを片手に奥か

ら駆け出して来た婆さんが頓とんきよう 狂な声を張り上げて「旦那様！

どうなさいました」と云う。見ると婆さんは蒼あおい顔をしている。

「婆さん！ どうかしたか」と余も大きな声を出す。婆さんも余から何か聞くのが怖おそろしく、余は婆さんから何か聞くのが怖いので御互にどうかしたかと問い掛けながら、その返答は両方とも云

わずに双方とも暫時^{ざんじにら}睨み合っている。

「水が——水が垂れます」これは婆さんの注意である。なるほど充分に雨を含んだ外套^{がいとう}の裾^{すそ}と、中折帽^{ひさし}の底から用捨なく冷たい点^{てん}滴^{てき}が畳の上に垂れる。折目^{おれめ}をつまんで抛^{ほう}り出すと、婆さんの膝^{そば}の傍^{しろじゆうす}に白繻子の裏を天井に向けて帽が転がる。灰色のチエスターフィールドを脱いで、一振り振って投げた時はいつもよりよほど重く感じた。日本服に着換えて、身顫^{みふる}いをしてようやくわれに帰った頃^{みはから}を見計^みつて婆さんはまた「どうなさいました」と尋ねる。今度は先方も少しは落ついている。

「どうするって、別段どうもせんさ。ただ雨に濡れただけの事さ」となるべく弱身を見せまいとする。

「いえあの御顔色はただの御色では御座いません」と伝通院でんずういんの坊主を信仰するだけあつて、うまく人相を見る。

「御前の方がどうかしたんだろう。先さツきは少し齒の根が合わないようだったぜ」

「私は何と旦那様から冷かされても構いません。——しかし旦那様じょうだんごと雑談事じゃ御座いませんよ」

「え？」と思わず心臓が縮みあがる。「どうした。留守中何かあったのか。四谷から病人の事でも何かなん云つて来たのか」

「それ御覧遊ばせ、そんなに御嬢様の事を心配していらつしやる癖に」

「何と云つて来た。手紙が来たのか、使が来たのか」

「手紙も使も参りは致しません」

「それじゃ電報か」

「電報なんて参りは致しません」

「それじゃ、どうした——早く聞かせろ」

「今夜は鳴き方が違いますよ」

「何が？」

「何がって、あなた、どうも宵よいから心配たまで堪りませんでした。どうしてもただごとじゃ御座いません」

「何がさ。それだから早く聞かせろと云ってるじゃないか」

「せんだって中じゅうから申し上げた犬で御座います」

「犬？」

「ええ、遠吠とおぼえで御座います。私が申し上げた通りに遊ばせば、

こんな事にはならないで済んだんで御座いますのに、あなたが婆さんの迷信だなんて、あんまり人を馬鹿に遊ばすものですから：

…」

「こんな事にもあんな事にも、まだ何にも起らないじゃないか」

「いえ、そうでは御座いません、旦那様も御帰り遊ばす途中御嬢様の御病気の事を考えていらしたに相違御座いません」と婆さんずばと凶星ずぼしを刺す。寒い刃はが闇ひらに閃むねうちめいてひやりと胸打を喰くわせられたような心持がする。

「それは心配して来たに相違ないさ」

「それ御覧遊ばせ、やっぱり虫が知らせるので御座います」

「婆さん虫が知らせるなんて事が本当にあるものかな、御前そんな経験をした事があるのかい」

「あるだんじや御座いません。昔しから人が烏鳴きからまが悪いとか何とか善く申すじや御座いませんか」

「なるほど烏鳴きは聞いたようだが、犬の遠吠は御前一人のようだが——」

「いいえ、あなた」と婆さんは大輕蔑だいけいべつの口調くちようで余の疑うたがを否定する。「同じ事で御座いますよ。婆ばあやなどは犬の遠吠でよく分ります。論より証拠これは何かあるなと思うとはずれた事が御座いませんもの」

「そうかい」

「年寄の云う事は馬鹿に出来ません」

「そりや無論馬鹿には出来んさ。馬鹿に出来んのは僕もよく知つてゐるさ。だから何も御前を——しかし遠吠がそんなに、よく当るものかな」

「まだ婆やの申す事を疑つていらつしやる。何でもよろしゅう御座いますから 明^{みようあさ}朝 四谷へ行つて御覧遊ばせ、きつと何か御座いますよ、婆やが受合いますから」

「きつと何かあつちや厭^{いや}だな。どうか工夫はあるまいか」

「それだから早く御越し遊ばせと申し上げるのに、あなたが余り剛情を御張り遊ばすものだから——」

「これから剛情はやめるよ。——ともかくあした早く四谷へ行つ

て見る事にしよう。今夜これから行っても好いが……」

「今夜いらしつちや、婆やは御留守居は出来ません」

「なぜ？」

「なぜって、気味が悪くついても起つてもいられませんか」

「それでも御前が四谷の事を心配しているんじゃないか」

「心配は致しておりますが、私だつて怖しゅう御座いますから」

折から軒を繞る雨の響に和して、いづくよりともなく何物か地を這うて唸り廻るような声が聞える。

「ああ、あれで御座います」と婆さんが瞳を据えて小声で云う。

なるほど陰気な声である。今夜はここへ寝る事にきめる。

余は例のごとく蒲団の中へもぐり込んだがこの唸り声が気にな

つて^{まぶた}瞼さえ合わせる事が出来ない。

普通犬の鳴き声というものは、後も先も^{なた}鉈刀で打ち切った薪^{まきぎ}雑木^{つぼう}を長く継いだ直線的の声である。今聞く唸り声はそんなに

簡単な無造作^{むぞうさ}の者ではない。声の幅に絶えざる変化があつて、曲

りが見えて、丸みを帯びている。蠟燭^{ろうそく}の灯^ひの細きより始まつて

次第に福やかに広がつてまた油の尽きた灯^{とうしん}心の花と漸次^{ぜんじ}に消え

て行く。どこで吠えるか分らぬ。百里の遠きほかから、吹く風に

乗せられて微かに響くと思ふ間に、近づけば軒端^{のきば}を洩れて、枕に

塞ぐ耳にも薄る^{せま}。ウウウと云う音が丸い段落をいくつも連ねて^{つら}

家の周囲を二三度繞ると、いつしかその音がワワワワに変化する

拍子、疾き風^とに吹き除けられて遙か向うに尻尾^{しっぽ}はンンと化して

闇の世界に入る。陽気な声を無理に圧迫して陰鬱いんうつにしたのがこの遠吠である。躁そうきよう狂な響を権柄けんべいずくで沈痛ならしめているのがこの遠吠である。自由でない。压制されてやむをえずに出す声であるところが本来の陰鬱、天然の沈痛よりも一層厭いやである、聞き苦しい。余は夜着よぎの中に耳の根まで隠した。夜着の中でも聞える。しかも耳を出しているより一層聞き苦しい。また顔を出す。しばらくすると遠吠がはたとやむ。この夜半やはんの世界から犬の遠吠を引き去ると動いているものは一つもない。吾家わがやが海の底へ沈んだと思うくらい静かになる。静まらぬは吾心のみである。吾心のみはこの静かな中から何事かを予期しつつある。されどもその何事なるかは寸分すんぶんの観念だにない。性しょうの知れぬ者がこの闇の世

からちよつと顔を出しはせまいかという掛念^{けねん}が猛烈に神経を鼓舞^{こぶ}するのみである。今出るか、今出るかと考えている。髪の毛の間へ五本の指を差し込んでむちやくちやに搔^かいて見る。一週間ほど湯に入^{はい}って頭を洗わなので指の股^{また}が油でニチャニチャする。この静かな世界が変化したら——どうも変化しそうだ。今夜のうち、夜の明けぬうち何かあるに相違ない。この一秒を待つて過ぐす。この一秒もまた待ちつつ暮らす。何を待つているかと云われては困る。何を待つているか自分に分らんから一層の苦痛である。頭から抜き取った手を顔の前に出して無意味に眺^{なが}める。爪の裏が垢^{あか}で薄黒く三日月形に見える。同時に胃囊^{いぶくろ}が運動を停止して、雨に逢った鹿皮を天日^{てんぴ}で乾^ほし堅めたように腹の中が窮^{きゆう}窟^{くつ}になる。

犬が吠えれば善いと思う。吠えているうちは厭でも、厭な度合が分る。こう静かになつては、どんな厭な事が背後に起りつつあるのか、知らぬ間に醸されつつあるか見当がつかぬ。遠吠なら我慢する。どうか吠えてくれればいと寝返りを打って仰向けになる。天井に丸くランプの影が幽かに写る。見るとその丸い影が動いているようだ。いよいよ不思議になつて来たと思うと、蒲団の上で脊髄が急にぐにやりとする。ただ眼だけを見張つて、たしかに動いておるか、おらぬかを確認する。——確かに動いている。平常から動いているのだが気がつかずに今日まで過したのか、または今夜に限つて動くのかしらん。——もし今夜だけ動くのなら、ただごとではない。しかしあるいは腹工合のせいかも知れまい。

今日会社の帰りに池の端の西洋料理屋で海老のフライを食ったが、
ことによるとあれが崇つてゐるかもしれん。詰らん物を食つて、
錢をとられて馬鹿馬鹿しい廃せよ。何しろこんな時は氣
を落ちつけて寝るのが肝心だと堅く眼を閉じて見る。すると虹
霓を粉にして振り蒔くように、眼の前が五色の斑点でちらちらす
る。これは駄目だと眼を開くとまたランプの影が氣になる。仕方
がないからまた横向になつて大病人のごとく、じつとして夜の明
けるのを待とうと決心した。

横を向いてふと目に入つたのは、襖の陰に婆さんが叮嚀に畳
んで置いた秩父銘仙の不斷着である。この前四谷に行つて露子
の枕元で例の通り他愛もない話をしておつた時、病人が袖口の綻

びから綿が出懸^{でかか}っているのを気にして、よせと云うのを無理に蒲
 団の上へ起き直つて縫つてくれた事をすぐ聯^{れん}想^{そう}する。あの時は
 顔色が少し悪いばかりで笑い声さえ常とは変らなかつたのに――
 当人ももうだいぶ好^よくなつたから明日^{あした}あたりから床^{とこ}を上げましょ
 うとさえ言つたのに――今、眼の前に露子の姿を浮べて見ると――
 ―浮べて見るのではない、自然に浮んで来るのだが――頭^{ひよう}へ氷
 囊^{のう}を載^のせて、長い髪を半分濡^ぬらして、うんうん呻^{うめ}きながら、枕
 の上へのり出してくる。――いよいよ肺炎かしらと思う。しかし
 肺炎にでもなつたら何とか知らせが来るはずだ。使も手紙も来な
 い所をもつて見るとやっぱり病氣は全快したに相違ない、大丈夫
 だ、と断定して眠ろうとする。合^ひわす瞳^{とみ}の底に露子の青白い肉の

落ちた頬と、窪^{くぼ}んで硝子張^{ガラス張り}のように凄^{すご}い眼がありありと写る。どうも病氣^なは癒^おつておらぬらしい。しらせはまだ来ぬが、来ぬと云う事が安心にはならん。今に来るかも知れん、どうせ来るなら早く来れば好^よい、来ないか知らんと寝返りを打つ。寒いとは云え四月と云う時節に、厚^{あつ}夜着^{よぎ}を二枚も重ねて掛けているから、ただでさえ寝苦しいほど暑い訳であるが、手足と胸の中^{うち}は全く血の通わぬように重く冷たい。手で身のうちを撫^なでて見ると膏^{あぶら}と汗^{あせ}で湿^{しめ}っている。皮膚の上に冷たい指が触^{さわ}るのが、青大将にでも這^はわれるように厭な氣持である。ことによると今夜のうちに使でも来るかも知れん。

突然何者か表の雨戸を破^われるほど叩^{たた}く。そら来たと心臓が飛び

上つて肋あばらの四枚目を蹴ける。何か云うようだが叩く音と共に耳を襲うので、よく聞き取れぬ。「婆さん、何か来たぜ」と云う声の下から「旦那様、何か参りました」と答える。余と婆さんは同時に表口へ出て雨戸を開ける。——巡査が赤い火を持って立っている。「今しがた何かありませんか」と巡査は不審な顔をして、挨拶もせぬ先から突然尋ねる。余と婆さんは云い合したように顔を見合せる。両方共何とも答をしない。

「実は今ここを巡行するとね、何だか黒い影が御門から出て行きましたから……」

婆さんの顔は土のようである。何か云おうとするが息がはずんで云えない。巡査は余の方を見て返答を促うながす。余は化石のごとく

茫然^{ぼうぜん}と立っている。

「いやこれは夜中^{やちゆう}はなはだ失礼で……実は近頃この界限^{かいがい}が非常に物騒なので、警察でも非常に嚴重に警戒をしますので——ちやうど御門が開いておつて、何か出て行つたような按排^{あんばい}でしたから、もしやと思つてちよつと御注意をしたのですが……」

余はようやくほつと息をつく。咽喉^{のど}に痞^{つか}えている鉛の丸^{たま}が下りたような気持ちにする。

「これは御親切に、どうも、——いえ別に何も盜難^{かか}に罹^かつた覺はないようです」

「それなら宜^{よろ}しゆう御座います。毎晩犬が吠えておやかましいでしょう。どう云うものか賊^{へん}がこの辺^{へん}ばかり徘徊^{はいかい}しますんで」

「どうも御苦勞様」と景氣よく答えたのは遠吠が泥棒のためであるとも解釈が出来るからである。巡查は歸る。余は夜が明け次第四谷に行くつもりで、六時が鳴るまでまんじりともせず待ち明した。

雨はようやく上ったが道は非常に悪い。足駄あしだをと云うと齒入屋へ持つて行つたぎり、つい取つてくるのを忘れたと云う。靴は昨夜うべの雨でどうてい穿はけそうにない。構うものかと薩摩下駄さつまげたを引掛けて全速力で四谷坂町まで馳かけつける。門は開あいているが玄關はまだ戸閉りがしてある。書生はまだ起きんのかしらと勝手口へ廻る。清と云う下しもうさ総生れの頬ほっペタの赤い下女まないたが俎かみの上で糠味噌ぬかみそから出し立ての細根大根ほそねだいこんを切っている。「御早よう、何はどうだ」

と聞くと驚いた顔をして、^{たすき}襷を半分はずしながら「へえ」と云う。
 へえでは埒^{らち}があかん。構わず飛び上つて、茶の間へつかつか這入
 り込む。見ると御母^{おつか}さんが、今起き立の顔をして叮嚀^{ていねい}に如鱗^{じょりん}
^{もく}木の長火鉢を拭^ふいている。

「あら靖雄^{やすお}さん！」と布巾^{ふきん}を持ったままあつけに取られたと云う
 風をする。あら靖雄さんでも埒^{らち}があかん。

「どうです、よほど悪いですか」と口早に聞く。

犬の遠吠が泥棒のせいときまるくらいなら、ことによると病氣^{なほ}
 も癒^{なほ}っているかも知れない。癒^{なほ}っていてくれれば宜^よいがと御母さ
 んの顔を見て息を呑み込む。

「ええ悪いでしょう、昨日^{きのう}は大変降りましたからね。さぞ御困り

でしたらう」これでは少々見^{けんとう}当が違う。御母さんのようすを見ると何だか驚いているようだが、別に心配そうにも見えない。余は何となく落ちついて来る。

「なかなか悪い道です」とハンケチを出して汗を拭^ふいたが、やはり氣掛りだから「あの露子さんは——」と聞いて見た。

「今顔を洗っています、昨^{ゆうべ}夕中央会堂の慈善音楽会とかに行つて遅く帰つたものですから、つい寝坊をしましてね」

「インフルエンザは？」

「ええありがとう、もうさつぱり……」

「何ともないんですか」

「ええ風邪^{かぜ}はとつくに癒^{なお}りました」

寒からぬ春風に、濛々たる小雨の吹き払われて蒼空の底ま
で見える心地である。日本一の御機嫌にて候と云う文句がどこか
に書いてあつたようだが、こんな気分を云うのではないかと、昨
夕の気味の悪かつたのに引き換えて今の胸の中が一層朗かになる。
なぜあんな事を苦にしたろう、自分ながら愚の至りだと悟つて見
ると、何だか馬鹿馬鹿しい。馬鹿馬鹿しいと思うにつけて、たと
い親しい間柄とは云え、用もないのに早朝から人の家へ飛び込ん
だのが手持無沙汰に感ぜらるる。

「どうして、こんなに早く、——何か用事でも出来たんですか」
と御母さんが真面目に聞く。どう答えて宜いか分らん。嘘をつく
と云つたつて、そう咄嗟の際に嘘がうまく出るものではない。余

は仕方がないから「ええ」と云った。

「ええ」と云った後で、^{あと}廃せば善^よかった、——一思いに正直なところを白状してしまえば善^よかったと、すぐ気がついたが、「ええ」の出たあととはもう仕方がない。「ええ」を引き込める訳^{わけ}に行かなければ「ええ」を活^いかさなければならん。「ええ」とは単^{たん}簡^{かん}な二文字であるが滅^め多^{った}に使うものでない、これを活かすにはよほど骨が折れる。

「何か急な御用なんですか」と御母さんは詰め寄せる。別段の案も浮ばないからまた「ええ」と答えて置いて、「露子さん露子さん」と風呂場の方を向いて大きな声で怒^ど鳴^なって見た。

「あら、どなたかと思ったら、御早いのねえ——どうなすったの、

——何か御用なの？」露子は人の気も知らずにまた同じ質問で苦しめる。

「ああ何か急に御用が御出来なすったんだって」と御母さんは露子に代理の返事をする。

「そう、何の御用なの」と露子は無邪気に聞く。

「ええ、少しその、用があつて近所まで来たのですから」とようやく一方に活路を開く。随分苦しい開き方だと一人で肚はらの中で考える。

「それでは、私わたしに御用じゃないの」と御母さんは少々不審な顔つきである。

「ええ」

「もう用を済^すましているの、随分早いね」と露子^{おおい}は大に感嘆する。

「いえ、まだこれから行くんです」とあまり感嘆されても困るから、ちよつと謙遜^{けんそん}して見たが、どっちにしても別に変りはないと思うと、自分で自分の言っている事がいかにも馬鹿らしく聞える。こんな時はなるべく早く帰る方が得策だ、長座^{ながざ}をすればするほど失敗するばかりだと、そろそろ、尻を立てかけると

「あなた、顔の色が大変悪いようですがどうかなさやしませんか」と御母^{おつか}さんが逆捻^{さかねじ}を喰^くわせる。

「髪を御刈りになると好いのね、あんまり髭^{ひげ}が生えているから病人らしいのよ。あら頭にはねが上つててよ。大変乱暴に御歩^{おある}行き

なすつたのね」

「日ひ和より下げ駄たですもの、よほど上つたでしょう」と背中せなかを向いて見せる。御母さんと露子は同時に「おやまあ！」と申し合せたような驚き方をする。

羽織を干して貰つて、足駄を借りて奥に寝ている御父おとつさんには挨拶もしないで門を出る。うらかな上天気で、しかも日曜である。少々ばつは悪かつたようなものの昨夜ゆうべの心配は紅こう炉ろ上じょうの雪と消えて、余が前途には柳、桜の春が簇むらがるばかり嬉しい。神か楽坂がらざかまで来て床屋へ這入る。未来の細君の歡心を得んがためだと云われても構わない。實際余は何事によらず露子の好すくようにしたいと思っている。

「旦那髻ひげは残しましょうか」と白服を着た職人が聞く。髻そを剃る
 といいと露子が云ったのだが全体の髻あごひげの事か。髻あごひげだけかわから
 ない。まあ鼻の下だけは残す事にしようとして一人できめる。職人が
 残しましょうかと念を押すくらいだから、残したって余り目立つ
 ほどのものでもないにはきまつている。

「源さん、世の中にや随分馬鹿な奴がいるもんだねえ」と余の髻あご
 をつまんで髪剃かみそりを逆ぎやくに持ちながらちよつと火鉢の方を見る。

源さんは火鉢の傍そばに陣取つて将棊盤しょうぎばんの上で金銀二枚をしきり
 にパチつかせていたが「本当にさ、幽霊だの亡者もうじゃだのつて、そ
 りや御前むか、昔むかしの事だあな。電気灯のつく今日こんにちそんな篋棒べらぼうな話
 しがある訳がねえからな」と王様の肩へ飛車を載せて見る。「お

い由公御前こうやつて駒を十枚積んで見ねえか、積めたら安宅^{あとかず}鮓^しを十銭奢^{おご}つてやるぜ」

一本歯の高足駄を穿^はいた下^{した}剃^{ぞり}の小僧が「鮓^{すし}じやいやだ、幽霊を見せてくれたら、積んで見せらあ」と洗濯したてのタウエルを畳みながら笑っている。

「幽霊も由公にまで馬鹿にされるくらいだから幅は利^きかない訳さね」と余の揉^もみ上げを米嚙^{こめか}みのあたりからぞきりと切り落す。

「あんまり短かかないか」

「近頃はみんなこのくらいです。揉み上げの長いのはにやけてておかしいもんです。——なあに、みんな神経さ。自分の心に恐^{こわ}いと思うから自然幽霊だって増長して出たくならあね」と刃^はについ

た毛を人さし指と拇おやゆび指で拭ぬぐいながらまた源さんに話しかける。

「全く神経だ」と源さんが山桜の煙を口から吹き出しながら賛成する。

「神経つて者は源さんどこにあるんだろう」と由公はランプのホヤを拭ふきながら真面目に質問する。

「神経か、神経は御めえ方々にあらあな」と源さんの答弁は少々漠然ばくぜんとしている。

白しろのれん暖簾かかの懸かつた座敷の入口に腰を掛けて、さつきから手垢てあかのついた薄っぺらな本を見ていた松さんが急に大きな声を出して面白い事がかいてあらあ、よつぽど面白いと一人で笑い出す。

「何だい小説か、食道くいどうらく楽じゃねえか」と源さんが聞くと松さん

はそうよそうかも知れねえと上表紙を見る。標題には浮世心うきよしんり理講義録りこうぎろく有耶無耶道人著とかいてある。

「何だか長い名だ、とにかく食道楽じゃねえ。鎌さんかま一体これや何の本だい」と余の耳に髪剃かみそりを入れてぐるぐる廻転させている職人に聞く。

「何だか、訳の分らないような、とぼけた事が書いてある本だがね」

「一人で笑っていいねえで少し読んで聞かせねえ」と源さんは松さんに請求する。松さんは大きな声で一節を読み上げる。

「狸たぬきが人を婆化ばかすと云いやすけれど、何で狸が婆化しやしよう。ありやみんな催眠術さいみんじゆつでげす……」

「なるほど妙な本だね」と源さんは煙に捲けむかれています。

「拙せつが一返べん古ふる榎えのきになつた事がありやす、ところへ源兵衛村の作さく蔵ぞうと云う若い衆しゅが首くくを縊くりに来やした……」

「何だい狸が何か云つてるのか」

「どうもそうらしいね」

「それじゃ狸のこせえた本じゃねえか——人を馬鹿にしやがる——それから？」

「拙くそが腕をニューと出している所へ古ふる禪ふんを懸かけやした——随分臭くそうげしたよ——……」

「狸の癖こいたごにいやに贅ぜい沢たくを云うぜ」

「肥こいたご桶たけを台にしてぶらりと下がる途端拙はわざと腕をぐにやり

と卸おろしてやりやしたので作蔵君は首を縊すなり損そこなつてまごまごして

おりやす。ここだと思ひやしたから急に榎えのきの姿を隠してアハハハ

ハと源兵衛村中へ響くほどの大きな声で笑ったやりやした。する

と作蔵君はよほど仰ぎょうてん天てんしたと見えやして助けてくれ、助けて

くれと禪を置去りにして一生懸命に逃げ出しやした……」

「こいつあ旨うめえ、しかし狸が作蔵の禪をとつて何にするだろう」

「大方きんたま鞆たも丸まるでもつつむ気だろう」

アハハハハと皆みんな一度に笑う。余も吹き出しそうになつたので職

人はちよつと髮剃を顔からはずす。

「面おも白しろえ、あとを読みねえ」と源さん大おおに乘氣になる。

「俗人は拙が作蔵を婆化したように云う奴でげすが、そりやちと

無理でげしよう。作蔵君は婆化されよう、婆化されようとして源兵衛村をのそのそしているのでげす。その婆化されようと云う作蔵君の御注文に応じて拙せつがちよつと婆化ばかして上げたまでの事です。すべて狸一派のやり口は今日こんにち開業医の用いておりやす催眠術でげして、昔からこの手でだいぶ大方たいほうの諸君子をごまかしたものでげす。西洋の狸から直じきでん伝に輸入致した術を催眠法とか唱となえ、これを応用する連中を先生などと崇あがめるのは全く西洋心酔の結果で拙などはひそかに慨がいたん嘆いたりの至に堪たえんくらいのものでげす。何も日本固有の奇術が現つたわに伝っているのに、一も西洋二も西洋と騒がんでもの事でげしよう。今の日本人はちと狸を軽蔑けいべつし過ぎるように思われやすからちよつと全国の狸共に代つて拙から諸君に

反省を希望して置きやしよう」

「いやに理窟りくつを云う狸だぜ」と源さんが云うと、松さんは本を伏せて「全く狸の言う通とおだよ、昔だつて今だつて、こつちがしつかりしていりや婆化されるなんて事はねえんだからな」としきりに狸の議論を弁護べんごしている。して見ると昨夜は全く狸に致いたされた訳わけかなと、一人で愛想あいそをつかしながら床屋を出る。

台町の吾家わがやに着いたのは十時頃であつたろう。門前に黒塗くろぬの車が待つていて、狭い格子こうしの隙すきから女の笑い声が洩もれる。ベルを鳴らして沓くつぬぎ脱だに這入る途端「きつと帰つていらつしやつたんだよ」と云う声がして障子がすうと明くと、露子が温かい春のような顔をして余を迎える。

「あなた来ていたのですか」

「ええ、お帰りになつてから、考えたら何だか様子が変だったから、すぐ車で来て見たの、そうして昨夕の事を、みんな婆やから聞いてよ」と婆さんを見て笑い崩れる。婆さんも嬉しそうに笑う。露子の銀のような笑い声と、婆さんの真しんちゆう鍬くわのような笑い声と、余の銅のような笑い声が調和して天下の春を七円五十銭の借家しゃくやに集めたほど陽気である。いかに源兵衛村の狸でもこのくらい大きな声は出せまいと思うくらいである。

気のせいかその後露子ごは以前よりも一層余を愛するような素振そぶりに見えた。津田君に逢つた時、当夜の景況を残りなく話したらそれはいい材料だ僕の著書中に入れさせてくれろと云つた。文学士

津田真方^{まかた}著幽霊論の七二頁にK君の例として載^のっているのは余の事である。

青空文庫情報

底本：「夏目漱石全集2」ちくま文庫、筑摩書房

1987（昭和62）年10月27日第1刷発行

底本の親本：「筑摩全集類聚版夏目漱石全集」筑摩書房

1971（昭和46）年4月～1972（昭和47）年1月

入力：柴田卓治

校正：LUNA CAT

2000年8月31日公開

2004年2月26日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.waozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

琴のそら音

夏目漱石

2020年 7月12日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>